

## 【報告 2】

アーカイブの原点～震災・まちの  
アーカイブの活動から

神戸大学地域連携推進室 佐々木和子

「アーカイブの原点」を1995年1月の兵庫県南部地震に求めたのは佐々木和子さんでした。阪神大地震地元NPO救援連絡会の設立に係わり、ボランティアによる歴史資料保全情報ネットワーク（史料ネット）の開設にも尽力されたようです。震災からわずか2ヶ月あとの3月27日にはボランティア団体、震災・活動記録室を発足させて「やったことを記録に残すボランティア大集会」を成功させました。

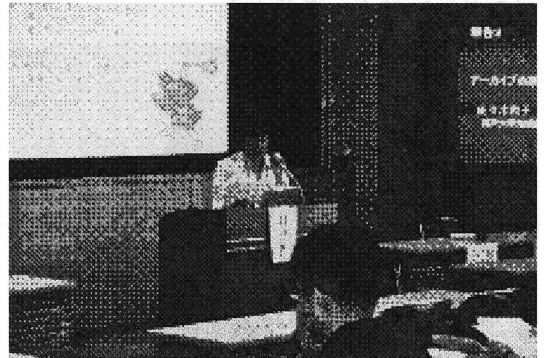
震災から3年後の1998年3月、「震災・まちのアーカイブ」の設立となりました。これは震災・活動記録室を発展させたもので、もちろんボランティア団体という位置付けです。「アーカイブ」という名称を提起したのは佐々木さんで、震災資料の記録と保存への目的と熱意が込められているものです。

「震災・まちのアーカイブ」の活動は、『瓦版なまず』第1号の発行（1998年）、メモリアルセンター展示計画に関する公開提言（2000年）、『アーカイブ前史』の発行（2003年）、「阪神大地震・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想展」の開催（2005年共催）、直近では『サザエさんたちの呼びかけ』の発行（2008年）と多彩な活動を繰り返しています。特徴は、ボランティア活動であること、きちんとした組織ではないことです。

では、「震災・まちのアーカイブ」設立の呼びかけ文から、佐々木さんの主張するアーカイブの原点をより鮮明にしておきましょう。

「未来の歴史資料、わずかに残された現在の震災一次資料は日々散逸の危機にさらされています」との認識から、震災の記録を後世に伝える活動をはじめたいと目的意識の明確さ

を汲み取ることができます。一方で、「なぜ直接的な救援活動ではなく、記録を残すことなのか」については、「記録を残すことは、私たち自身がこれまでを検証し、よりよい未来を自分の手で作るために欠くことのできない作業」だと記しています。



報告者の佐々木和子氏

もうひとつ、「アーカイブ」の意味です。アーカイブとは、史料そのもの、史料群を指すものですが、同時に史料を集める機関（史料館、文書館など）を象徴する言葉でもあることから、被災した一人ひとりが記憶をたどりながら、記録を検証することのできる「場」が必要だと訴えています。その「場」は、「まち」にあることが重要だといっています。「震災・まちのアーカイブ」は、こうした考えのもとに名づけられました。

具体的な活動は、①震災一次資料に関する調査・保存・整理を行うこと、②資料を生み出した人・機関が自らその資料を保存してゆくことを支援していくこと、③被災地の記憶と記録を考える作業を行うこと、④通信『瓦版なまず』を発行することです。

震災から13年を経過しているのですが、「まちのアーカイブ」だからこそ継続が力になっているを感じ取りました。